

自宅での移動手段を含めた排泄動作獲得を目指した症例 ～転倒後症候群に対する恐怖心へのアプローチ～

高木 楓由

【keyword】 転倒恐怖感、排泄、歩行

【はじめに】

左大腿骨転子部骨折を受傷し、転倒後症候群によって排泄動作が全介助になった症例を担当した。転倒恐怖感の軽減により、移動手段を含めた排泄動作が自立し、自宅退院に至った症例を以下に報告する。尚、発表に際し当院倫理委員会、本人、家族より同意を得た。

【症例紹介】

症例は左大腿骨転子部骨折術後の90代女性である。観血的手術施行1ヶ月後より担当した。他院でアルツハイマー型認知症（AD）の診断を受けている。本人HOPEは歩きたい、家族HOPEは日中トイレ自立で自宅退院であった。

【初期評価】

改訂長谷川式簡易知能評価スケール（HDS-R）は17/30点、下肢の徒手筋力検査（MMT）は3（右>左）、FunctionalBalanceScale（FBS）は28/56点、機能的自立度評価法（FIM）は53/126点であった。起居動作は自立、立ち上がり・移乗・歩行は近位監視で、恐怖感の訴えがあった。連続歩行距離はシルバーカー使用で2mであった。難聴、ADがあり複雑な質問紙法は困難であるため、恐怖感に対する独自の質問紙法を取り入れ、立ち上がり・立位・歩行への恐怖感を「ある」0点、「少しある」1点、「ない」2点の3段階6点満点で評価し、0点であった。

【経過】

介入当初、転倒恐怖感により臥床傾向であったため、離床・左下肢荷重から開始した。質問紙による立ち上がりと立位への恐怖感が軽度となった段階（2/6点）で、3m程度のシルバーカー歩行を開始した。さらに歩行への恐怖感が軽度となった段階（3/6点）で、実用歩行として病棟トイレでの排泄動作訓練を実施した。立ち上がりと立位への恐怖感が消失し、歩行への恐怖感が軽度の段階（5/6点）で、T字杖使用での歩行訓練に移行した。日中の排泄はシルバーカー使用し、看護師付き添いにて病棟トイレで実施した。立ち上がり・立位・歩行への恐怖感が消失（6/6点）し、自発的なシルバーカー使用での歩行が可能となった。排泄は昼夜ともシルバーカー使用し病棟トイレ自立となった。自宅環境について、トイレ前・中にシルバーカーの置き場所がなく、居室からトイレまでの動線は、段差のない壁伝い約5mであった。そのため、約10mのT字杖使用と壁伝い歩行を行った。T字杖使用での歩行は、壁伝い遠位監視で可能となった。

【最終評価】

HDS-Rは25/30点、下肢MMTは左右4、FBSは44/56点、FIMは96/126点で、トイレ動作は自立であった。歩行はT字杖近位監視、自宅に必要な伝い歩きは自立であった。質問紙法は6/6点であった。

【考察】

本症例は、転倒恐怖感が原因でADLが低下していた。転倒恐怖感は患者の主観を聴取することが中心で客観的に評価することは難しい。しかし、本症例に合わせた質問紙を作成し、客観的に評価することで訓練の難易度を設定することが容易となった。また、質問紙の点数の変化により訓練の難易度の変更が明確になった。恐怖感の克服に必要なことは小さな成功体験の積み重ねであり、そのためには訓練の難易度とその変更のタイミングが重要だと考える。